

## 審査の結果の要旨

氏名 エイエイミン

いかなる国家においてもそうであるように、ミャンマーにおいても最も重要な課題の1つが教育環境の改善および教育水準の向上である。しかしながら、とくにミャンマーにおいては、多数の山岳民族等の存在による文化的言語的差異や経済的な地域間民族間格差等々により、状況が極めて複雑であるにもかかわらず、その改善や向上に資するための統一された尺度から得られた客観的な教育評価データが皆無であった。

本論文の目的はそのようなミャンマーの教育事情を踏まえて、ミャンマーの高校生用に特定のカリキュラムに依存しない2つのテスト、すなわち、数的推理能力テストとミャンマー語の語彙理解能力テストを開発することにある。しかも、それらのテストがテスト理論的観点から要求される水準をも十分満たすものであることが意図されている。

本論文は、7章より構成されている。第1章は導入であり、研究の目的が述べられている。第2章では過去の研究のレビューが行われており、とくに関心下のテストの開発に用いられた理論である項目反応理論やテストの測定論的性質に関する議論が紹介検討されている。第3章では、予備テストおよび本テスト合わせて1,085名のミャンマーの高校生より得られたデータに基づいた数的推理能力テストの開発と作成されたテストについての測定論的検討が行われている。第4章では、ミャンマー語の専門家等によるテスト項目の吟味を経た後に行われた、1,265名の高校生のデータに基づいたミャンマー語の語彙理解能力テストの開発と吟味が行われている。第3章においてもまた第4章においても、2つのテストの開発に利用された項目反応理論のモデル仮定が満たされるかどうかの吟味は的確に行われており、また両テストの測定論的特性が十分満足いくものであったことが示されている。第5章では、これら両テストと教科成績との関連が交差妥当性研究の技術を用いて検討されている。とくにここでは、各高校ごとに教科で用いられる試験内容が異なるという困難さを、交換可能性を前提としたベイズ回帰と交差妥当化の技術とを巧妙に組み合わせることによって解決していることが注目される。第6章では、テストの開発に用いられたデータを利用して、地域、学校、性別による能力推定値の差異を分析し、今後の更なる調査の必要性と展望とを論じている。第8章はまとめである。

以上のように、本論文はミャンマーの高校生の数的理解能力と語彙理解能力とを2つの一次元尺度の上で比較し得るように、2つの非常にすぐれたテストを開発しその客観的特性を明確にしたもので、ミャンマーの今後の教育改善に大きな寄与をなすものと評価された。よって本論文は博士（教育学）の学位論文として十分優れたものと認められた。